

ベネッセアートサイト直島：どのようにして始まったか

ベネッセアートサイト直島とは、教育・出版社であるベネッセホールディングスと関連団体である福武財団が、瀬戸内海の直島・豊島・犬島の3島を中心に、アートを通じた地域振興を目的として行っている活動の総称です。この活動は、直島のベネッセハウスミュージアムや地中美術館、犬島の犬島精錬所美術館などの美術館、コミュニティアートプロジェクトや施設、島内各地で展示されているパブリックアート作品などで構成されています。アート作品の多くは、野外や瀬戸内海の風景を意識して設計された施設内に展示されており、特定の場所で鑑賞したり体験したりするために制作されたサイトスペシフィック・アートです。

このプロジェクトは、1989年に「直島国際キャンプ場」というキャンプ場が直島南部にできたのがきっかけで始まりました。建築家の安藤忠雄（1941年生）が監修したこのキャンプ場には、敷地内にモングルの伝統的なゲル（円形テント）が設置され、訪問客が宿泊できるようになっているほか、オランダ人アーティストのカレル・アペル（1921–2006年）の彫刻も展示されていました。直島国際キャンプ場は、直島の自然の中でアートを展示することで教育・文化的な目的を達成しアートをテーマにした島のまちづくり(地域復興)を進めようとしていた、このプロジェクトの火付け役となりました。

続いて、安藤が設計した美術館兼ホテルであるベネッセハウスミュージアムが開館しました。ミュージアムの内外に徐々に展示作品が集まり、直島の風景にアートを加えるきっかけとなりました。杉本博司（1948年生）、草間彌生（1929年生）などの芸術家に制作を依頼しました。1998年には本村地区でアートハウスプロジェクトが開始し、古民家を改修し、それを地域の歴史に基づいた芸術作品に変えるために芸術家が招かれました。

サイトスペシフィック・アートの考えは、2004年に安藤忠雄が制作した地中美術館が開館したことでさらに発展しました。周囲の自然との共生関係を目指し、瀬戸内海のパンoramaを邪魔しないよう地下に建設されたこの美術館では、自然光のみで照らされた、クロード・モネ（1840–1926年）による「睡蓮」シリーズなどの作品を鑑賞できます。常時展示されている他の作品には、鑑賞する人が天井にある四角い窓から空を見上げることのできる、ジェームズ・タレル（1943年生）による「オープンスカイ」があります。

ベネッセアートサイト直島は、近隣の豊島や犬島にも拡大し、2010年以降は、3年毎に瀬戸内海地域で開催される国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」を共催しています。